

見学時間:9:00~16:30 (入場 16:00) 調査員による説明(1)9:30 (2)11:00 (3)13:30 (4)15:00 (各 30分)

1. 発掘調査の目的

駿府城跡天守台跡地の整備方針決定に向けて、天守台の正確な位置や大きさ、構造、残存状況といったデータを得るため、平成 28 年度から令和元年度まで 4 年をかけて天守台全体の発掘調査を行いました。最後の年に当たる令和元年度は、これまでに発見された慶長（けいちょう）期の天守台や天正（てんしょう）期の天守台の補足調査と今川期の遺構の有無の確認調査を行いました。

2. 4 年間の発掘調査でわかったこと

(1) 慶長期（大御所家康）の天守台の検出

平成 28～30 年の調査で慶長期の天守台の全容と石垣の残存状況を確認しました。天守台の大きさは約 61m×約 68m であることが確認でき、日本一大きい天守台であることがわかりました。これは絵図に描かれていた天守台の大きさとはほぼ一致しており、絵図の表記どおり、石組の井戸も発見されました。

(2) 天正期（豊臣方）の天守台・小天守台の検出、金箔瓦の発見

平成 30 年に慶長期天守台とは異なる野面積み（のづらづみ）の天守台（約 33m×約 37m）を検出しました。天守台の近くからは大量の金箔瓦が発見されました。さらに令和元年の調査で天守台東側に続く小天守台を検出しました。石垣の積み方や瓦の特徴などから慶長期より前の天正期に築かれたものだと考えられます。

(3) 今川期の遺構の発見

令和元年度の調査で、今川時代の遺構（溝＝堀）や出土品（陶磁器など）を確認することができました。今川館を特定するものではありませんが、過去の駿府城公園内の調査で見つかったものと同時期のものだと考えられます。



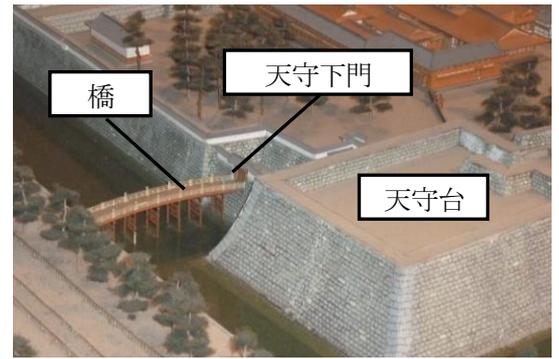
3. 令和元年度の調査成果

●説明ポイント①：本丸と二ノ丸をつなぐ橋の痕跡

慶長期の天守台の補足調査として、慶長期天守台北東側の本丸堀の底を調査しました。その結果、堀底から天守台東側の天守下門（てんしゅしたもん）から二ノ丸にかけて架かっていた木橋の痕跡（橋脚の柱が埋まっていた穴）がいくつか見つかりました。

また、橋や天守下門に使用されていたと考えられる木材、銚（かすがい）※、鋸（びょう）、瓦などが見つかりました。江戸時代の文字資料には、幅約5m、長さ約37mの橋の記録があり、幕末まで修理や架け替えが行われていたようです。

※銚（かすがい）…2つの材木をつなぎとめるために打ち込むコの字型のくぎ



●説明ポイント②：天正期（豊臣方）の天守台と小天守台

平成30年度に発見された天正期天守台の東側で、1辺約20mの小天守台を発見しました。同時期の小天守台として知られるのは、滋賀県の坂本城や広島県の広島城がありますが、今回の発見は遺構を確認できる最古の小天守台として位置付けられます。

天正期の天守台や小天守台の石垣は、自然の石やあまり加工していない石を積んだ「野面積み」という積み方で、すき間にたくさんの川原石を詰めています。石垣の勾配は慶長期天守台より緩やかで、隅角部分の石垣は、長方形の石を交互に積んでいく「算木積み（さんぎづみ）」を意識していますが、技術的に未発達です。豊臣の大坂城や聚楽第にも匹敵する1～3mの巨石を用いており、天正期の駿府城には、巨石を選んで運び、それを高く積むという最新技術が用いられ、それを可能とする人員体制が整えられていたことが想像されます。また、天正期の天守台でも、石組の井戸が発見されました。



●今川期の遺構と遺物

今川期の遺構の有無の確認を行うため、調査用の溝（トレンチ）を数か所設けて掘削したところ、深さ約1.7m、幅約3mの薬研堀（やげんぼり）と呼ばれるV字型の堀や、陶磁器が見つかりました。

これらは、過去に駿府城公園やその周辺で発見された今川期の遺構と同じ時期のものと考えられます。今川館を特定するものではありませんが、この辺りには何らかの建物があり、堀で区画していた可能性が考えられます。



4. 今後の予定

令和2年2月で掘削作業は終了します。今後は、2年間をかけてこれまでに出土した遺物（瓦、陶磁器など）や遺構（石垣など）の分析調査、整理作業（遺物の洗浄・図面作成、石垣の測量図面の整理など）を行い、「発掘調査報告書」をまとめていきます。

今後は、発掘調査で見つかった貴重な二つの天守台を保存しながら活用していくため、天守台遺構の野外展示を進めていく予定であり、令和2年度から必要な検討を行っていきます。